

## 西村嘉助・渡辺則文編

### 竹原市史 第二卷論説篇

頼春水・杵坪兄弟を生んだ安芸の竹原は、江戸時代塩業で栄えた町であり、今日も、山ぎわにひっそりと寄り合った町並には、由緒ありげな寺院や商家の軒が深く影を落とし、海からまっすぐ町のはずれに入る通船堀の立派さが往時の繁盛をしのばせる。そのおだやかなたたずまいは、国鉄呉線から現竹原港に至る工場・港湾地帯の、新開地に特有の殺風景な雰囲気と対照的である。

〈序説 竹原市史の基調（西村嘉助）〉によれば、古来、その地域は賀茂川水系の農村集落と海岸の臨海集落の二要素から成り、両者の接点に竹原市街地が形成された。右の新開地は鉄道が塩浜を横切って敷設されたことにより成立したものである。今や塩浜は流下式塩田への転換を終ったばかりで消滅し、期を等しくして竹原町は臨海の町村を合併して竹原市となった。

市史編集は町制時代の昭和二九年に発足し、十年を費して論説篇が先ず刊行のはこ

びとなった。編集者は広島大学の西村嘉助（現東北大学）・渡辺則文両氏。論説篇叙述の態度は「学問的論文に対すると同じであり」、「論文集の体裁を具えている」。

いわば市史としては硬派に属する編集方針をとっているのも、頼春水氏の「芸藩通志」編修を持ち出すまでもなくこの地に永く続いた郷土研究の伝統のしからしむるところであるらしく、それらの「総決算としての意味」をもたそうという編者らの意気ごみによっている。

各章の目次と執筆者は次の通りである。

第一章 竹原周辺の考古学的考察（藤田等・本村豪章）、第二章 都宇・竹原荘の成立（坂本賞三）、第三章 竹原下市の発展と町人文化（渡辺則文）、第四章 近世前期における竹原製塩業の成立と発展（中部よし子）、第五章 近世港町における商品流通の形態的推移（畑中誠治）、第六章 近世竹原塩田背後地村落における林野の問題（川崎茂）、第七章 明治期における竹原周辺の農村構造（有元正雄）。

第一章は、遺物・遺跡の編年と文化様相から共同体のあり方に言及し、第二章は、従来明確でなかった竹原荘の成立を、寛治

四年七月十三日の官符によって下賀茂社領荘園となったもの、都宇荘は竹原荘に対する新荘として都宇郷の荘園化によって成立したものと考証し、平安後期の「新郷」についても論じている。

第三～六章では、江戸時代竹原の諸側面が追求されている。都宇竹原荘の外港的位置にあった馬橋古市が、土砂の堆積によって機能を失うとともに、下流の新開地に竹原下市が成立し、大規模な築堤を前提とする入浜式塩田の開設がこの町に飛躍的な発展をもたらし、元禄・正徳期に塩業の最盛期を迎える。この頃、垂加流の神道儒学を主とする町人文化が開花し、上層塩田経営者から学者が輩出する。頼兄弟の登場はその頂点を示したが、塩業の衰退とともに頼一門を除いて学者は絶えた。頼家の家業が紺屋であったことは象徴的である。

町は、周辺農村との間に商業・高利貸活動、貢租の積出、塩業労働者の需給等の諸関係によって結ばれる経済圏を構成していたが、同時に内海の港に特有な遠隔地取引の中継港的性格によって外界と連なり、またそのことによって幕藩制的な規制を受けていた。それら様々な要素の変動と塩業の

盛衰の織りなす形相が豊富に語られている。塩業と不可分な背後地村落の林業生産については、たたら地域に比して先進的な生産構造を有したとの指摘がある。

第七章では周辺農村における地租改正の施行を分析し、明治十年代後半に地主小作関係の一般的成立がみられたと結論している。

以上、内容の片鱗を述べるに止まった。計画では、このあと総説篇・資料篇(上下)が刊行される予定と聞く。完成の日の近いことを願って拙い紹介の筆をおくこととする。(A5版四八六頁 図版二六 昭和三八年九月 竹原市役所発行 非売品)

(朝尾直弘)

### 委員会だより

◇ 「史林」四七巻六号、甚だおくれればせでありましたが、ようやくお届けできるようになりました。四七巻を通して結局刊行のおくれはとりかえていない訳ですが、鋭意努力は致しているのでありまして、刊行

の正常化まで、今少し時間をおかし下さるようお願いいたします。

◇ 刊行のおくれの結果、「学界消息」など、季節的に甚だずれてしまう結果となります。しかし、発行日以後のニュースを掲載いたしますことは、これまでおかしこととでありまして、後世誤解を生むおそれもあります。要は一日も早く正常刊行をとりかえすことでありますので、「季節感のズレ」は、今しばらく御辛抱下さい。

◇ 昨夏来、会員カードにて、多数の方々から有益な御意見をお寄せ下さいまして有難うございました。編集の面に関しては、「地方会員の原稿をもっと積極的にとりあげよ。」「地方史研究についても配慮せよ。」「地理・古考学の記事をもっと豊富に。」といった有益な御意見が寄せられています。

こうした御意見は、早速今後の編集の上で参考とさせていただきます。とともに、会員各位の御協力をお願いいたします。「史林」の掲載論文には、従来とも、京都・地方の差別を設けたことなど、決してありませんが、遠くの方々の御寄稿が残念ながらまことに数少ないのが現状です。もつとどしどしお寄せ下さいますよう、期待

いたします。地理や考古学の調査・発掘のニュースは、四八巻からはより組織的に掲載してゆくつもりでおります。

◇ 会員名簿は、目下印刷を進めております。「会員カード」をまだお返ししたくない方が若干ありますが、折かえしお返し下さい。

◇ 会費の方も、よろしくお願いいたします。本年、会費を掘置きましたことで、まことに苦しい財政状況となっております。会費赤字の方は、全員のこらさず清算下さらなければ、本年の收支は相償いできませんので、年度末までに必ずご清算下さい。なお「史林」の会費は前納が原則でありますこともお忘れなく。

史 林 (第四七巻第六号)  
一九六四年一月二五日印刷 定価二四〇円  
一九六四年一月一日発行

発行所 史 学 研 究 会

京都市左京区吉田本町  
京都大学文学部内  
理事長 田 村 実 造  
振替京都五一五五番  
京都市下京区西七条御所ノ内中町五〇  
印刷所 中村印刷株式会社